

目的語無冠詞名詞のスキーマ*

大久保 朝 憲

1. はじめに

フランス語で無冠詞名詞が発話内にあらわれるパターンの典型のひとつとして、他動詞の目的語位置に生じるものが知られている。

- (1) *Faites gaffe, Dieu est une femme.*
- (2) *Je prend plaisir à faire du ski nautique.*
- (3) *Toute la nuit elle a tenu compagnie à sa grand-mère malade.*
- (4) *Cette monnaie n'a plus cours depuis deux ans.*

このような例¹⁾についての先行研究としては、「ゼロ限定詞」という概念をもちいた ANSCOMBRE (1986, 1990) などが知られるが、本稿ではむしろ、限定詞をともなわない形式とそれがもたらす意味との関係に注目し、無冠詞名詞実現のメカニズムについて、理論的背景として LANGACKER (1987a, b, 1991) の認知文法の枠組みに立脚した考察をおこなう。

2. 仮説 1: 無冠詞名詞は「関係」をあらわす

この章では、以下の仮説について用語の定義もふまえながら検証してゆく。

- (5) 仮説 1: 目的語位置の無冠詞名詞は「関係」を領域として切り出す抽象名詞である。

2.1. 「名詞」の規定

まず「名詞」という範疇そのものについて規定する。以下は LANGACKER (1987a) にそった規定であり、本稿の立場も基本的にはこれに等しい。

- (6) 名詞は、あるドメイン内の 1 領域をさししめす²⁾。

「ドメイン」とは、ある言語表象をとらえるのに必要な認知的な「場」のことで、物理的実体をさししめす名詞にとっての物理空間、動詞がさししめす過程にとっての時間的延長などが基本的なものである。いくつかのドメインが必要な場合に、その中でも認知的にもっとも突出したドメインのことをとくに主要ドメインと言う。名詞がさししめすのは、その主要ドメイン内のある領域のことで、たとえば名詞 *crayon* は、物理空間でこの実体がしめる領域をさししめすと考える。LANGACKER では、このことを名詞がこの領域を「切り出す profile」と言い、いわゆる「意味

作用」一般をこの用語であらわしている。さらに、その領域が主要ドメインで本質的な境界をもっているかどうか、可算 / 質量という区別をもたらす。crayon のような可算名詞は、鉛筆の外形がこの名詞の意味の一部である以上本質的な境界をもっているが、eau のような質量名詞ではそのような境界はないか無視され、内的に均質な実体としてとらえられる。

2.2. 抽象名詞

さらに、主要ドメインを物理空間としない名詞を総じて「抽象名詞」と呼ぶことにすると、無冠詞名詞として出現可能な名詞のおもなものは、おおむね次のリストのいずれかの項目に属する³⁾もので、これらはいずれもその意味で「抽象名詞」である。

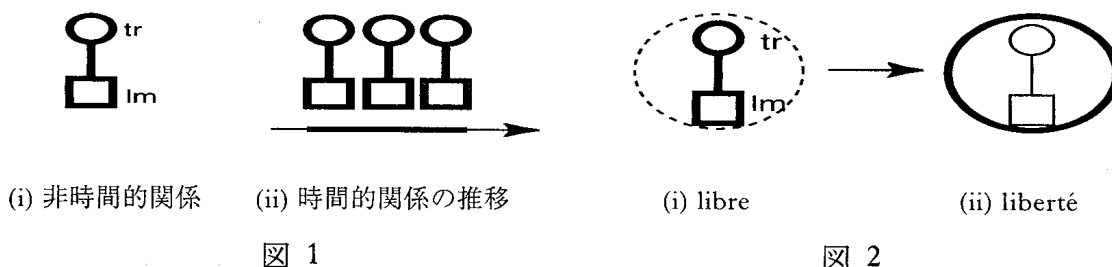
- (7) a. 行為・過程をあらわす名詞: faire *soumission*, faire *sécession*, faire [avoir, donner] *confiance*, faire [prendre] *acte de qc.*, prendre *garde*, prendre [donner] *naissance*, etc.
- b. いわゆる抽象概念をあらわす名詞: faire *état de*, faire *office de*, avoir *droit*, prendre *possession de*, prendre *conscience*, prendre *modèle sur*, mettre *fin à*, etc.
- c. 感情・感覚をあらわす名詞: faire *fureur*, avoir [faire] *peur*, faire [avoir] *horreur*, avoir *faim*, avoir *soif*, faire [avoir] *mal*, avoir *peine*, avoir [faire, prendre] *plaisir*, etc.

また、次のように単独の語彙としてはこのような名詞のグループにふくまれないものも、無冠詞名詞として出現する際には同様の方向に意味的に拡張していると考えられる。

- (8) tenir *tête*, faire *mouche*, faire *feu*, tenir *pied*, faire *peau neuve*, faire *chou blanc*, etc.

さらに、これらの抽象名詞は、どれもある「関係」を領域としてあらわすことができる名詞である。ここで言う「関係」とは、名詞がさしめすもののように独立して存在する実体ではなく、典型的には形容詞、動詞などがさしめす、実体と実体のかかわりかたのことである。libre という形容詞の意味は、「自由である主体」と、それが「何から」自由であるかという2つの参与項を想定し、その「関係」を切り出したものである。さらに、これに時間が加わって、関係の時間的推移が切り出されるのが動詞(たとえば *se délivrer*)による叙述である。LANGACKER は、このような「関係」を図1のようなイメージ図式で記述することを提案している。(i) は非時間的な関係、(ii) は動詞が叙述する時間的推移にそって切り出された関係をあらわす。円と四角形は関係への参与項をあらわし、とくに円はそれが名詞であることをあらわしている。また太線はそこが切り出されていることをあらわし、水平方向の矢印は時間軸をあらわす。関係において、そのもっとも主要な参与項のこと

を「運動体 trajector (以下 tr)」と呼び、その次に重要な参与項のことを「基準点 landmark (以下 lm)」と呼ぶ。libre の例では、その主体が tr, 「何から」にあたるものが lm ということになる。「関係」そのものは参与項をむすぶ直線であらわされる。



さて、このような関係の全体は、しばしばあるまとまりをもつものとしてとらえられ(図 2(i), 破線の円), これが領域として顕在化することで, ある関係全体が名詞として切り出されることがある。liberté という名詞は, このようにして形容詞 libre から派生的に概念化される(図 2(ii)). (7) に整理された名詞は, 上記のような意味でさまざまな抽象的ドメインにおける「関係」を領域化した名詞として解釈可能である。

2.3. 無冠詞名詞は「関係」しかあらわさない

抽象名詞のすべてが「関係」をあらわしているわけではなく, その関係の結果・産物などをあらわすこともしばしばである(後述). しかし目的語位置の無冠詞は, 「関係」を領域として切り出した抽象名詞に限られると考えられる。

- (9) a. Au milieu de ces rues bruyantes, seule *fait exception* celle où j'habite. (例外となる)
 b. J'ai *fait une exception* parce qu'il s'agissait de l'ami Doisneau. (ある例外をもうける)
- (10) a. Patrick *a fait mystère* de ce qui s'est passé cette nuit. (秘密にする)
 b. Patrick *a fait un mystère* de ce qui s'est passé cette nuit. (あることを秘密にする)
- (11) a. Le président *a fait cadeau* à son épouse d'un caniche. (贈り物をする)
 b. Le président *a fait un cadeau* à son épouse. (あるものを贈る)
- (以上大久保 1994)
- (12) a. Max *a fait erreur* sur la personne. (人違いをする)
 b. Max *a fait une erreur* sur ce point. (ある間違いをおかす)
- (13) a. Ceci *fait problème* à Marie. (問題化する)

b. *Paul a fait un problème de math.* (ある問題を出す)

大久保(1994)では、無冠詞名詞が質量名詞であることを強調したが、本稿ではむしろ同じ名詞が切り出すものの違いが反映していると考えている。つまり、各例文で目的語名詞句が不定冠詞をともなっているものは、いずれも関係の産物をさししめしているのにたいして、無冠詞名詞は関係そのものをさししめしており、それが動詞句全体の意味にも反映している。

3. 仮説 2: 無冠詞名詞はタイプのみを指定されている

以下は、目的語位置の無冠詞名詞の概念化を考える上でもっとも重要な仮説である。

(14) 仮説 2: この無冠詞名詞は、タイプのみを指定された名詞である。

名詞が発話の中で「名詞句」として組織化されてゆくプロセスで、LANGACKER (1991) はタイプの指定 *type specification*・具体化 *instantiation*・位置づけ *grounding* という3つのレベルを想定している。ここでは、このレベル分けをわれわれなりに再解釈して、問題の無冠詞名詞を考えてみよう。

3.1. タイプの指定

LANGACKER (1991) の定義を引くと、タイプの指定とは、「ある実体を、特定の具体事例ではなく種として抽象的にとらえること⁴⁾」である。これを解釈すると、たとえば、ネコを叙述するために語彙 *chat* を選ぶことで、この名詞がさししめすカテゴリーによって、その「タイプ」が「指定」されることになる。ここでは、認知対象をほかのタイプから区別する以上のことはなされていないのである。

3.2. 具体化

「細部をくわしくすること。より特殊な用法では、切り出された実体が具体化のドメインにおいてある決まった場所を持っていて、したがって同じタイプのほかの諸事例から区別されたひとつの事例を構成するものとしてとらえること⁵⁾。」タイプを指定された名詞は、発話の場に位置づけられるよう具体的なものにしなければならない。*chat* というタイプが、ここでは一匹の実際のネコが物理空間のどこかに位置づけられうるものとして具体化される。その意味から、数量化がなされるのもこのレベルで、フランス語では数量化に関する限定詞(単・複不定冠詞、部分冠詞)がここで選択されていると考えられる。

3.3. 量化的位置づけもされない名詞

本稿では、名詞句実現の最終段階である「位置づけ」をくわしくとりあげる余裕はないが、ここでは発話の場における名詞句の定性・不定性がきめられる。さて、われわれがあつかう無冠詞名詞はこのような名詞句実現のプロセスの中で、タイプの指定だけをうけた名詞が、ある条件のもとに目的語名詞句として発話内に実現したのではないかというのが本稿の立場である。

広義の抽象名詞には、単に「関係」をさししめす以外の切り出しかたをする場合があることは前にふれた(2.3.). ある関係が、ある種の質量として量的なドメインでとらえられるときには、部分冠詞による具体化がおこり、つぎのような名詞がこのような具体化をうけいれる。

(15) Vous avez *de la chance*.

(16) Il faut *du courage* pour faire ça.

また、文脈上で関係の参与項に具体的実体が代入される場合には、関係の一具体例を領域としてとらえることが可能になり、可算名詞として不定冠詞をともなって具体化する。

(17) C'est *une chance* que tu aies retrouvé ton portefeuille.

(18) Il ne me reste qu'*une possibilité*.

(19) Elle est dans l'hôpital parce qu'elle a fait *une chute* de cheval.

(20) Il m'a fait *une prise* à la nuque.

タイプの指定のみをうけた無冠詞名詞が実現するのは、抽象名詞が「関係」自体をとくにあらわそうとするときである。すでにみた(9)-(13)の例にくわえて、次の例は、とくに数量化がされていないことが解釈上重要な例である。

(21) a. Ils ont fait *une diversion* avant l'offensive. (軍事行動の「牽制」;
具体的)

b. Ce travail a fait *diversion* à mon angoisse. (「気晴らし」; 精神的)

(22) a. Les étudiants ont fait *une fête*. (具体的なできごととしての「パーティ」)

b. Le chien fait *fête* à son maire. (「歓迎」; 精神的)

(23) a. Elle fait *une triste figure*. (顔の物理的な「表情」)

b. Elle fait *triste figure*. (「人柄」)

上の各例に共通しているのは、不定冠詞つきの名詞は物理的な参与項によって実現される「関係」の一回性の産物を切り出すのにたいして、無冠詞名詞は精神的なドメインにおけるある関係自体を切り出しているということである。このような関係も、たしかに具体的な事態に即してはいるのだが、無冠詞名詞は具体的な事態の詳細を抽象化し、それをそれぞれの名詞がさししめす「関係」の布置にあてはめているのである(大久保 1994 参照).

(24) a. La vieille femme avait *de la peine* à marcher.

b. J'ai *peine* à accepter une pareille injustice.

(25) a. Le cuisinier a donné *du corps* à la pâte.

b. Enfin, ils ont commencé à donner *corps* au projet.

(26) a. André Gorz a fait *scandale* en publiant un dossier intitulé "Quand les chômeurs seront heureux". (ひんしゆく)

- b. Il ont fait *du scandale* dans la rue. (大騒ぎ)
- (27) a. Les policiers ont fait *des violences* aux prisonniers. (暴力)
- b. Paul a fait *violence* à ses associés. (強制) (GIRY-SCHNEIDER 1987, p. 251)

無冠詞名詞と複数不定名詞句, 部分冠詞つきの不定名詞句の対比についても同様のことが言える。(24)では, 目的語に部分冠詞がつくと(24a)のように具体的事実に即して量化しやすい肉体的苦痛の解釈となじみやすくなり, 無冠詞の場合は(24b)のように量化されない「関係」としての精神的苦痛となじみやすくなる⁶⁾。また(25)では, 主要ドメインが物理空間であるとき部分冠詞をともなう名詞が, 抽象名詞として解釈されると無冠詞となっている。(26)でも, 「関係」そのものは無冠詞名詞によって, その具現形態のひとつは量化可能な不定名詞句として実現している。(27)は複数名詞の例だが, 具体化のドメインに関して同様のことが言える。このように, 無冠詞名詞と不定名詞句の対比はどれについても原理的には同じで, これは, 部分冠詞などの存在で, 事例のレベルでは質量名詞も可算名詞と同様境界の定まった領域を切り出すというフランス語の特徴による。しかし, このような境界の確定は, 名詞句実現のすべての場合について可能であるわけではなく, そのとき, いかなる量化も位置づけも拒否する名詞の「名詞句」としての実現として, 無冠詞名詞が使用されるのである。

4. 仮説3: 動詞のスキーマ性と無冠詞名詞

では, このようなタイプ指定のみの名詞句がなぜ実現可能なのだろうか。最後に, この問題について無冠詞名詞を目的語にとる動詞の性質から考えてみよう。このような動詞としては *faire* が数の上でも頻度の上でも圧倒的で, そのほか *avoir*, *prendre*, *donner*, *porter*, *tenir* などが比較的よくみられる。これらの動詞の意味的貢献はきわめて低く, 目的語によってあらわされる関係を「もたらす」, そのような関係が「成立している」という意味以上のものはくみとれない⁷⁾。そこで, われわれは次の仮説を提案する。

- (28) 仮説3: この無冠詞名詞は, スキーマ的な動詞が切り出す関係全体の意味内容を精密なものにする⁸⁾。

「関係」の叙述が参与項の存在に依存していることについては前に述べた。この参与項は, 動詞のみでは *tr*, *lm* としてスキーマ的に設定されるだけであるが, 発話内では, 具体的な名詞句などによって満たされる。換言すると, 動詞の *tr* や *lm* は, 動詞句として, また定形節として組織化されてゆく上で, 「精密化される場所 *elaboration site (e-site)*」(LANGACKER, 1987b)として設定されている。そこで, 通常の動詞+位置付けされた事例 *grounded instance* (名詞句)によって組織化される動詞句のイメージ図式は次の図3(a)のようにあらわされる。

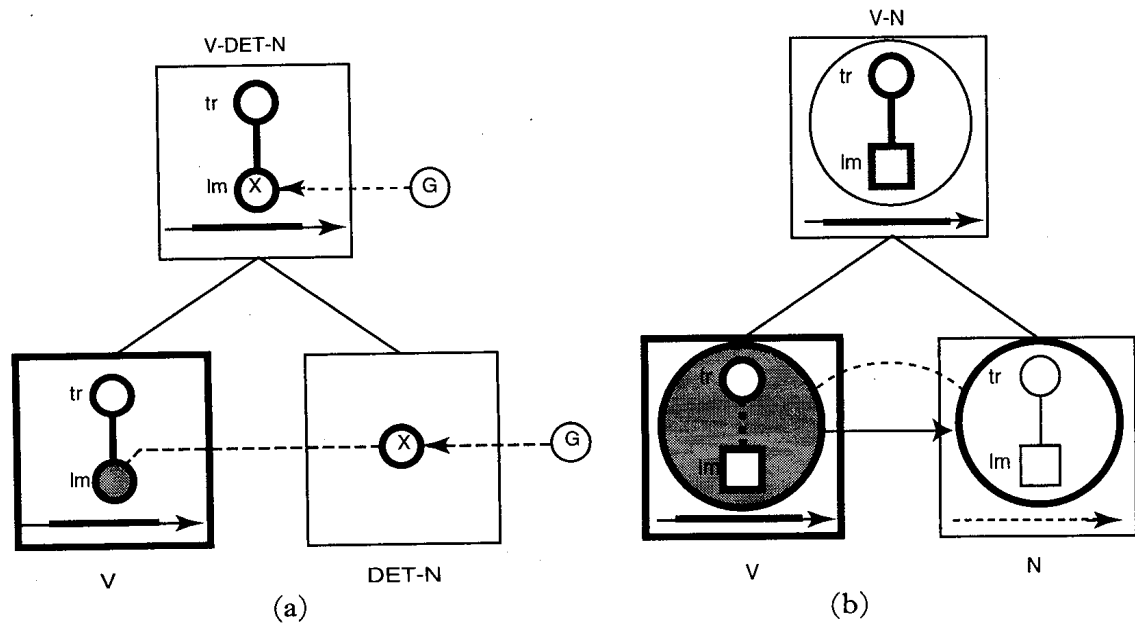


図 3

図 3(a) で、斜線部分が e-site をあらわし、これが、具体化され発話の場に位置づけられた名詞句 図 によって満たされる。ⓐ は発話の場をあらわし、そこから出た点線の矢印が、この名詞句が発話の場に位置付けられていることをしめしている。これにたいして動詞+無冠詞名詞の場合が図 3(b) のイメージ図式である。

動詞は何らかの「関係」を時間的に切り出すだけなのにたいして、目的語位置の無冠詞名詞はつねに特定の「関係」をあらわし、その関係を領域として切り出している。そこで、動詞においては、それが叙述すべき「関係」全体が lm かつ e-site となっていて、これを目的語の名詞が意味内容的に精密にするという形で組織化されているのが、動詞+無冠詞名詞なのである。このように考えると、無冠詞名詞を目的語にとれる動詞は意味的にスキーマ的でなければならず、faire, avoir がそのような動詞の大部分であることが説明される。目的語の無冠詞と動詞の意味的スキーマ性の相関を示唆するつぎのような例がある。

- (29) *se serrer la ceinture* / **se serrer ceinture* / *faire ceinture* / **faire la ceinture*

「我慢する」という意味で解釈されるべき上の表現で、問題になるのは無冠詞名詞の分布である。se serrer la ceinture は、字義通りに解釈された行為全体が隠喩的解釈のもとになる。それにたいして動詞が faire に変わると無冠詞名詞が必須となる。このとき、名詞 ceinture は換喩的写像によって se serrer la ceinture 全体が切り出していた関係「我慢すること」を領域として切り出し、動詞はこの関係の叙述に貢献する具体的なものである必要がなくなり、faire が選ばれる。そして、概念化のしかたがこのように変わると、もはや *faire la ceinture のような表現は不可

能になるのである。類例として、ほかにもつぎのようなものがある。

- (30) a. *faire pression / exercer une pression / *exercer pression*
 b. *faire autorité / exercer l'autorité / *exercer autorité*
 c. *faire chantage / exercer un chantage / *exercer chantage* (cf. *faire du chantage*)
 d. *faire alliance / conclure une alliance / dénoncer une alliance / *conclure alliance / *dénoncer alliance*

5. 結論

目的語位置の無冠詞名詞は、タイプ指定のみで目的語位置に実現した名詞で、「関係」を領域として切り出した抽象名詞に属する。そして、きわめてスキーマ的な動詞が叙述すべき「関係」の意味内容を精密なものにするという機能が、このような実現を可能にしているのである。
 (大阪大学大学院博士後期課程)

註

*) 本稿は、第19回関西言語学会ワークショップ「認知言語学からみた『境界』」でおこなった口頭発表を進展させたものである。多くの有益な御意見をいただいた井元秀剛氏、春木仁孝氏、定延利之氏、平塚徹氏に深く感謝する。なお指摘されうる本稿の問題点についてはひとえに筆者の責任による。

1) 本稿の例文の大部分は筆者の収集したものであるが、繁雑さをさけるため、他の論文からのものをのぞいて出典は割愛した。

2) “A NOUN designates a REGION in some domain.” (p. 58)

3) この3つの項目は便宜上もうけたもので、いかなる意味でも語彙の「分類」ではない。

4) “The conception of an entity abstractly, as a kind, rather than as a specific instance.” (LANGACKER 1991, p. 555)

5) “Elaboration. In a more specific use, conceiving of a profiled entity as having a certain location in the domain of instantiation, thus constituting an instance distinct from other instances of the same type.” (LANGACKER 1991, p. 549)

6) この例では部分冠詞つきのものを無冠詞のものと交替させることができる。これは、一般に、肉体的苦痛は多くの場合精神的苦痛をとめない、また精神的苦痛が肉体的苦痛をとまなうことも少なくないというわれわれの現実にその根拠がもとめられる。

7) これらの動詞はまた、*opérateur*, *verbe support* などと呼ばれることもある (GIRY-SCHNEIDER 1978, 1987)。

8) この仮説は、京都産業大学の平塚徹氏(個人談話)の提案にもとづいており、以下の2つのイメージ図式も氏の原案をほぼそのまま採用している。

参考文献

- ANSCOMBRE, J.-C. (1986): “L'article zéro en français: un imparfait du substantif?” *Langue Française*, 72, Larousse, Paris.
 ——— (1991): “La détermination zéro: quelques propriétés” *Langages*, 102, Larousse, Paris.
 GIRY-SCHNEIDER, J. (1978): *Les Nominalisations en français-l'opérateur “faire” dans le lexique*, Droz, Genève-Paris.
 ——— (1987): *Les prédicats nominaux en français*, Droz, Genève.

- LANGACKER, R. W. (1987a): "Nouns and Verbs" *Language*, 63.
—— (1987b): *Foundations of Cognitive Grammar vol. I*, Stanford University Press, Stanford, California.
—— (1991): *Foundations of Cognitive Grammar vol. II*, Stanford University Press, Stanford, California.
大久保朝憲(1994): 「フランス語の無冠詞表現—名詞の認識と冠詞の相関—」『言語文化学』3号, 大阪大学言語文化学会.